

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

73

—夏の企画展—

アート オブ
スター・ウォーズ展
エピソード I・II + α

福島県立博物館

THE ART
OF
STAR
WARSTM

昔むかし、はるか銀河系では……

スター・ウォーズとは？

一九七七年、映画スター・ウォーズシリーズがジョージ・ルーカス監督によりこの世に送り出されました。登場するや否や、まったく新しい冒険ファンタジーとしてたちまち全世界の人々に熱狂的に受け入れられました。一方では中世騎士物語を思い起こさせる神話的モチーフに満ち満ちた世界。他方では誰もが見たことのない壮麗で輝かしい科学技術の姿。一見相反する要素が違和感なく一つに結びつき、どこか別の宇宙の話なのに今この宇宙の未来でもあり過去でもある、といったスター・ウォーズの独特の世界ができてきたのです。そしてなによりも装置、小道具、衣装などすべての面において「芸術的」な精神により統一されたデザイン。見ることの楽しさを改めて教えてくれるのがこの映画シリーズなのです。

この魅力的で壮大なファンタジーは、エピソードIVからはじまりV、VIと進み、次にさかのぼってI、IIが公開され、最後のエピソードIIIの完成が待たれているところです。最後のエピソードの公開により数世代にわたる物語のミッシングリングが「発見」されるのです。

県立博物館ではどんなことが

県立博物館はエピソードI、IIを中心とした夢のようなめくるめく未来世界の展示を創りだす予定です。ダース・ベイダー、C-3PO、などおなじみのキャラクターは県立美術館で同時公開されるエピソードIV、V、VIに譲りますが、スター・ウォーズの美の極致ともいえる女王アミダラの衣装の数々がここにはあります。そして配線だけが目立つアナキン手作りのC-3POは逆に部品の質感がリアリティーを感じさせてくれますし、エアスピーターやポッドレーサーなどの乗り物系はなかなかの出来です。それからあのポッドレース場、ジャバ・ザ・ハットのロイヤルボックス模型には思わずにやりとしてみます。え、どうして？ その答えは展示会場で！

日本国内でのスター・ウォーズの展示会は福島県が全てのコレクションを公開する最後の場所になります。

会津でスター・ウォーズを！

会津の地には奥会津の深いブナの原生林から森の霊気が吹き込まれています。磐梯山のふもと猪苗代湖は別名である天鏡、天の鏡の名のとおり、とおり過ぎ去った時を映しこんでいます。つまり、会津は自然に抱かれ、歴史の積み重なった伝統のまちなのです。いくつもの戦いの記憶

—夏の企画展—

アート オブ スター・ウォーズ展

エピソード I・II + α

会期：7月3日(土)～9月26日(日)

がまだ息づいている場なのです。なにしろ博物館自体が鶴ヶ城の三の丸に位置するのですから。その会津での華やかなスペースファンタジーの展覧会。ミスマッチ？ いえいえ、二つの異質な世界の融合から生み出される不思議な世界こそが魅力を加速させてくれるのです。会津の地で見るスター・ウォーズだからこそその感動をお楽しみください。

主な展示資料

(シリーズの撮影に使われた実物大の模型、縮小模型、衣装、プロダクションペインティング、映像など多岐にわたります。)

ナブー・ネー・スターファイター (プロダクションペインティング) (エピソードI)
アミダラの王座の間ガウン (エピソードI)
アミダラの元老院ガウン (エピソードI)
C-3PO (スケルトン) (エピソードI)
セブルバのポッドレーサー (エピソードI)
アナキンのエアスピダー (エピソードII)
ジャミーラ女王 (エピソードII)
オーウエンのスウィープバイク (エピソードII)

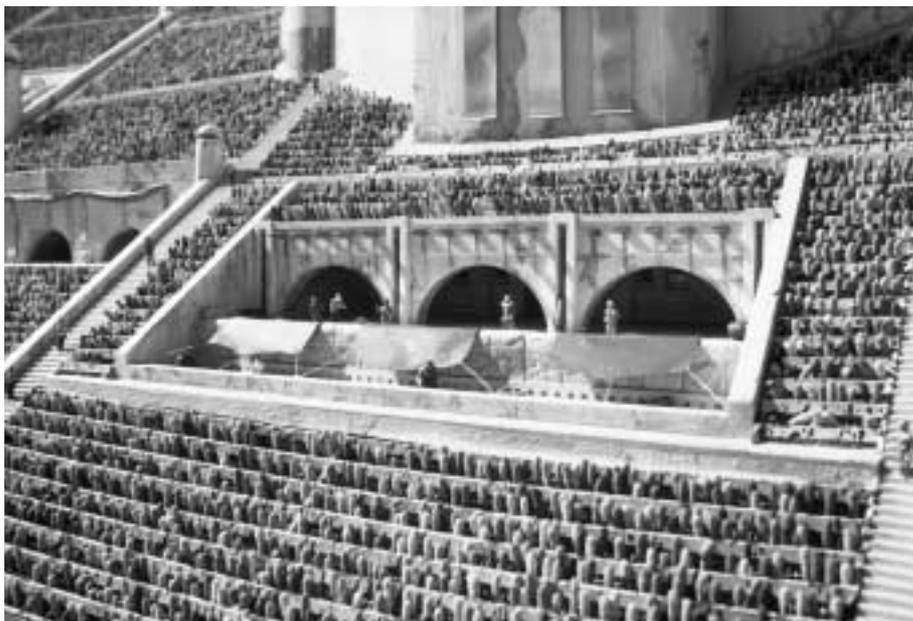
豊富な映像コンテンツを展示室でも楽しめます。

展覧会の楽しみ、ミュージアムショッピングも充実しています。

会期中スター・ウォーズのビデオ上映会を開催します。
詳細は未定です。



アミダラの王座の間のガウン(コスチューム)



ジャバ・ザ・ハットのロイヤルボックス(大型模型)

企画展《アート オブ スター・ウォーズ展 エピソード・+》は平成一六年七月三日(土)から九月二六日(日)まで開催しています。
企画展観覧料 一般・大学生一、四〇〇円(一、二〇〇円) 中・高校生一、〇〇〇円(八〇〇円) 小学生五〇〇円(四〇〇円)
美術館との両館セット券 一般・大学生二、五〇〇円(一、三〇〇円) 中・高校生一、五〇〇円(一、四〇〇円) 小学生七〇〇円(六〇〇円) () は二〇名以上の団体の場合の料金です。
* 会期中は駐車場の混雑が予想されます。公共交通機関をご利用ください。
* 県立美術館では「アート オブ スター・ウォーズ展 エピソード・+」が同時開催されています。

講演要旨 企画展 戊辰戦争といま」記念講演会

平成一六年四月二十五日(日)

「白虎隊はどのように語られてきたか」

講師 会津大学 文化研究センター 後藤 康二氏

一八六八(慶応四)年八月に起きた飯盛山での白虎隊自刃という出来事は、早くも翌年四月に「官許新聞 天理可楽怖」の中で報じられました。その後、白虎隊のことは明治期の文学・芸能などにもとりあげられ、広く知られるようになりました。

明治以後の歴史書では、新政府側の視点から書かれた歴史記述の合間に白虎隊の話が挿入されたり、また戦史とは別に逸聞として独立して取り上げられることもありました。印象深い白虎隊自刃の物語は、「天理可楽怖」の記事の内容を踏襲しながらも、歴史記述の中では比較的独立性の強いとりあげられ方をしています。

教科書では、明治三〇年代後半にはじまる国定教科書の時期に、白虎隊を取りあげたものが多くなります。歴史教科書の中で、白虎隊の部分が次第に長くなり、誇張され情緒的な描写になってゆきます。とくに戦時中は、会津藩・会津戦争が背景に引き、むしろ白虎隊の方



が主役となるような記述に変わります。また官軍・賊軍という対立の構図が消え、その対立を超越し、それらを包摂する存在として天皇のことが教えられるようになってゆきます。皇民化教育の中で、白虎隊の藩主に対する忠誠は、天皇への忠誠に読み替えられることになりました。

白虎隊自刃の物語は、不本意にも軍国主義教育に利用されたといえます。もともと物語自体が、歴史記述の中から遊離しやすいものであったため、その時代に都合のよい価値観の中で利用されてしまったのです。今後は、白虎隊の少年という属性に注目しながら、広く受容された背景を考えてみたいと思います。

講演会と終了後に行われた展示解説会には、多くの方々が参加してくださいました。

(文責 学芸員 高橋充)



「木曜の広場」が始まりました

赤坂憲雄館長による講座「木曜の広場」会津学事始め。四季の生業と暮らし」が、毎月一回全一二回にわたり開催されることになりました。赤坂館長は、「東北学」という地域学の研究にとりこんでおり、そのひとつに「福島学」の構想もいだいています。初年度は、県立博物館が立地する会津地方の民俗、特に生業と暮らしを中心に、「会津学」の構築をめざしています。

講座の方法は、「木曜の広場」という赤坂館長と学芸員の対話形式をとり、終了後聴講者からの質問に答えるという方法で行います。第一回は四月八日に「会津農書」の世界」と題して、会津地方の農業技術を記述した「会津農書」から、近世初期の会津の村落の成立過程と、近世の会津の民俗について佐々木長生学芸員と行いました。この講座を聴講された方から、新たな「会津農書」下巻の写の存在の情報提供があるなど、講座の成果があらわれています。

第二回目以降の講座の日程および内容は、左記のとおりです。多くの方々の御聴講をお待ちしています。会場は県立博物館講堂、時間は午後一時三〇分から三時までの予定です。

- 第二回 五月一三日 会津風俗帳の世界
- 第三回 六月三日 田植え
- 第四回 七月一日 赤米
- 第五回 八月七日(土) 焼畑とカブ
- 第六回 九月二日 収穫儀礼
- 第七回 一〇月七日 神去来
- 第八回 一一月一八日 サケとマス
- 第九回 一二月二日 正月と小正月
- 第一〇回 一月一三日 雪の民俗
- 第一一回 二月三日 民具の世界
- 第二二回 三月三日 森の文化



会津漆器のイメージ

小林めぐみ 美術担当

漆工品には、実に様々な裝飾技法があります。金や銀などの粉を漆で附着させる蒔絵。貝殻の内側の薄い板をはめ込む螺鈿。模様を刃物で彫って溝に金粉を埋める沈金。漆を何層にも塗り重ねて、模様を彫りだす彫漆、など枚挙に暇がありません。

全国各地の漆器産地の代表的な技法となっているものもいくつかあります。細かい貝をモザイクのように貼り込んだ杣田細工は富山の産。沈金は輪島漆器の一つの顔です。四国の高松では江戸時代から続く彫漆技法が現在も息づいています。

では、漆器産地として必ず名を挙げられる会津の漆器はどうでしょうか。会津漆器といえは、このような漆器とすぐ頭に思い浮かぶ姿は、残念ながら定着していません。

しかし、江戸時代には、会津漆器に対する一つの強いイメージがあったようです。器について書かれた書物の中に、会津漆器についての記述として「箔碗」「箔盆」という言葉がしばしばみられます。金箔を貼って裝飾をしたお椀やお盆のことだと思われまます。

享和二年（一八〇二）に、杉野駁華という人物によってまとめられた『新撰包丁梯』という料理書があります。この中に様々な器を紹介している箇所があり、「會津碗」も取り上げられています。菱形と細長い短冊のような形の模様を描いた碗の図の傍らには、次のような説明がされています。

「會津碗、喰初碗の形、その他形は色々である。切箔絵である。また、箔碗ともいふ。（筆者口語訳）」
菱形や短冊形の模様は、漆で箔を附着させた裝飾を示

していました。杉野駁華にとつて、会津碗とは、箔、恐らく金箔で飾った碗というイメージだったのです。字が違つのですが、会津の名産品として、『薄箔碗』『薄箔盆』を挙げている書物もあります。

寛永一五年（一六三八）から正保二年（一六四五）頃に、京都の俳人松江重頼が著した俳句集『毛吹草』には全国の名産品もあわせて記されています。会津の名産品は、「陸奥（中略）會津、漆、蝋燭、薄碗、同盆」というように、漆と漆の実からつくっていた蝋燭、そして薄碗、薄盆が列挙されています。「薄碗」「薄盆」は同じ音の漢字をあてたもので、「箔碗」「箔盆」のことでしょう。一七世紀中頃の京都の人にとつても、会津漆器の代表的なイメージは箔絵の漆器だったようです。

では、江戸時代を通じて、会津漆器の代表であったと思われるこの「箔碗」「箔盆」は、具体的にはどのような漆器だったのでしょうか。『新撰包丁梯』の図が少しヒントを与えています。菱形と短冊形を組み合わせた箔の模様です。そして明治十一年（一八七八）に出版された日本最初の工芸書『工芸志料』の会津塗に関する記述も参考になります。

「天正十八年（一五九〇）、一千二百五十年、蒲生氏郷が会津の領主となつた。氏郷は漆工に命じて、はじめ南部碗を模造して漆器を製作させた。これを会津塗といひ、その碗を薄碗と云ひ、その盆を薄盆と云ふ。（筆者口語訳）」

『工芸志料』は、「薄箔碗」「薄箔盆」が南部碗に似ているという情報を教えています。菱形と短冊形の金箔を貼り、南部碗に似た漆器。現在残っている江戸時代の会津の漆器の中に、そのような裝飾のものがあるのです。

曲線を連ねた雲のような縁取りをし、その上に菱形と短冊形の金箔を組み合わせて模様として貼り付けています。そして縁取りの中は、色漆によって描かれた漆絵が華やかに、可憐に埋めています。描かれているのは、菊

か松竹梅がほとんどです。

南部碗は、色漆で雲形の縁取りをし、その上に金箔を貼って、余白に菊を色漆で描いています。

雲形の形、金箔の貼り方、色漆の種類や漆絵の描き方など細かい違いはありますが、大まかなところではこのふたつの漆器は似ています。

会津で作られたこのような漆器は「会津絵」とも呼ばれ、江戸時代後期から明治、大正時代にかけて作られたものがたくさん残っています。量の多さと器の種類豊かなさは、会津漆器の一つのブランドとして広く受け入れられ、需要があったことを示しています。

金箔による平面的な金色の輝き、漆絵の暖かみのある表現は、蒔絵などとは異なる魅力を持っています。その魅力を少しでもお伝えしたいと、「会津絵 会津の漆絵漆器」という報告書を刊行しました。また、常設展示歴史美術のテーマ展示として七月二二日から開催する「うるしえ 漆絵」で会津絵漆器を展示します。かつて会津漆器の代表であった「会津絵」が、多くの方にもう一度知っていただけることを願っています。



松竹梅漆絵碗



青光塗菊漆絵大平

Q：最近、鶴ヶ城の濠や博物館の上空でカラスではない黒い鳥を見かけますが、なんとという鳥ですか。

A：カワウです。鶴ヶ城で以前は見かけなかったのですが、一九九九年七月二〇日に初確認して以来、二〇〇一年までは、年間の確認率は三十七%でした。それが、二〇〇二年には一八%になり、なんと二〇〇三年は六五%になりました。また、二〇〇三年は一度に七羽確認するなど数でも目立ってきました。そして二〇〇四年には一月にも確認し、鶴ヶ城では、毎月見ることのできる野鳥になりました。二〇〇四年三月三日には、鶴ヶ城牛沼西側に一〇羽もあり、うち一羽は枝をくわえていました。

Q：カワウとは、どんな鳥ですか。

A：ペリカン目ウ科の鳥で体長八〇センチ、翼を広げる

黒い鳥の正体

と二三〇センチほどにもなる大型の鳥です。潜水が得意で主に魚を餌にしています。一九七〇年頃は開発と環境汚染のため、全国で三〇〇〇羽まで激減しましたが、現在は回復し六万羽くらいだそうです。長良川の鵜飼いは有名ですが、仲間のウミウを使っています。カワウも以前は伝統漁法の担い手として使われていたそうです。

Q：新聞やテレビで、カワウのことが話題になっていますが、どのようなことが問題となっているのですか。

A：魚が主食のため、漁業被害が深刻になっています。体が大きいので、一日に食べる量も約五〇〇グラムだそうです。アユの成魚五匹分ですね。福島県には現在一〇〇〇羽ほどと推計されているので、一日に五〇〇キログラムの魚を食べることになります。

また、コロナ（集団営巣地）での糞害も問題になります。大量の糞は土壌を酸性化させるため、木が枯れてしまつたのです。東京の浜離宮庭園や琵琶湖の竹生島ではこのことが問題になっていました。

Q：福島県ではどうなっていますか。

A：食害は阿武隈川、阿賀川、養殖池等で出ています。また、コロナは猪苗代町、本宮町、高郷村で確認されています。県は二〇〇〇年に対策協議会を設立し、二〇〇三年にはカワウを有害鳥獣に指定し、目標数を捕獲することにしました。

Q：カワウはこれからどうなるのでしょうか。

A：昔は、カワウの糞を集めて肥料にしたり、コロナの下で魚を拾って食べたりしていたそうです。人とカワ

Q&A

回答者
自然担当
古川裕司

ウが共存できていたのでしょう。都心ではハシブトガラスが増えて問題になっていますが、原因は人間のゴミの出し方にあるようです。日本産トキは絶滅してしまいましたが、トキは江戸時代、藩によっては田を荒らす害鳥として駆除されていました。野生生物はいつも人間の都合で、危機にたたされます。カワウにしても増える条件がとつたために、絶滅の危機から回復してきたのだと考えられます。カワウの問題もカワウだけで議論するのではなく、河川の改修工事や養殖、放流などの問題を含めて、環境全体としてとらえていく必要があると思います。



カワウ

九月一八日(土)自然史講座「シリーズ自然史③ 鶴ヶ城の自然」(野外)を行います。鶴ヶ城の自然の豊かさを生き物を通して実感していただけだと思います。カワウにも出会えるかもしれません。一ヶ月前から申込みを受けつけます。

トピックス

体験学習習習室

「さわってたしかめよう」のコーナーが新しくなりました

今回は、体験学習室に設けられた「さわってたしかめよう」のコーナーをご紹介します。

このコーナーは、体験学習室のいちばん奥にある小さなコーナーです。実は、資料にさわられるコーナーは以前からこの場所にあります。けれども、これまでは限られたスペースにさまざまな資料を配置していたので、ことなくインパクトに欠けるものだったことは否めません。そこで昨年の十月にこのコーナーを変更し、今後は展示のテーマを決めて、およそ半年ごとに展示替えをすることにしました。

変更後第一弾のテーマ「会津の漆器と曲物」に続き、今年の四月からは自然分野が担当する「化石にさわってみよう」を展示中です。あまり大きな標本はありませんが、すべて実物の化石です。また、ここでは日頃めつたに出会わない外国産の化石を直接手に取っていただくようと考えました。アンモナイト、ペレムナイト、三葉虫、そして海生八虫類モササウルスの歯など、盛りだくさんです。オルドビス紀やデボン紀など古生代の化石もたくさんあります。あなたが今手に取った一つのアンモナイトが、三億年を超える時間を記録しているのですよ。化石にふれることは、人類の歴史を遙かに超えた、悠久の時間“を”手のひらに載せる“ことだと思えます。むずかしいことは抜きにして、化石が語る時の流れを、ご自分の手で感じ取ってみてください。



秋の企画展予告

ふくしまの工芸

工芸は生活文化の芸術とも言われます。工芸という概念は、明治時代に西洋から入ってきました。武器、武具、調度品、文房具、飲食器など、生活の様々な場面で用いられてきた品々が、明治時代以降、工芸という概念で総括されて現在にいたっているのです。

本企画展ではそのような多種多様な工芸品を二つのテーマを切り口としてご紹介します。神仏への信仰心、亡くなった人への供養、戦勝祈願など神仏への祈りを形とした工芸品を取り上げる「祈りのかたち」、茶の湯や能などの遊芸、飲食、おしゃれ心を表現した装身具など生活の中で息づいてきた工芸品を扱う「くらしの美」です。



棗彫木彩漆笥

「棗彫木彩漆笥」など福島にゆかりのある工芸品の優品や、相馬焼、会津本郷焼、会津漆器など福島でつくられてきた工芸品を広くご覧頂く機会となると思えます。

今年の秋は、「ふくしまの工芸」展で芸術の秋も堪能されてはいかがでしょう。

秋の企画展《ふくしまの工芸》は平成二六年一〇月三日(土)から二月五日(日)まで
企画展観覧料 一般・大学生三〇〇円/高校生一七〇円/小・中学生一〇〇円

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「うるしえ 漆絵」
会期 七月二二日(水)から
八月二二日(日)まで
「真心を伝える 手紙の歴史」
会期 八月三一日(火)から
一〇月二一日(月・祝)まで

講演・講座

歴史講座
「古文書入門4 近世」(実技)
講師 当館学芸員
日時 七月一〇日(土)午後一時半～三時
「古文書入門5 近世」(実技)
講師 当館学芸員
日時 八月二二日(土)午後一時半～三時
「古文書入門6 近世」(実技)
講師 当館学芸員
日時 九月二一日(土)午後一時半～三時

体験講座
「虫かごをつくる」(実技)
講師 技術伝承者 阿部吉致さん
日時 七月一七日(土)午後一時半～三時
「昔話を語る」(実技)
講師 語り部 横山幸子さん
日時 八月一日(日)午前二時～正午
「草木染め1」(実技)
講師 染織工芸家 山根正平さん
日時 八月二八日(土)午前二時～午後三時
「草木染め2」(実技)
講師 染織工芸家 山根正平さん
日時 八月二九日(日)午前二時～午後三時
美術講座
「暮らしの中の美術」 吉祥 3
桃源郷 夢の世界、

講師 当館学芸員 川延安直・小林めぐみ
日時 七月二二日(水)午後一時半～三時
「暮らしの中の美術」 吉祥 4
鶴亀 幸を運ぶいきもの」
講師 当館学芸員 川延安直・小林めぐみ
日時 八月一八日(水)午後一時半～三時
「暮らしの中の美術」 吉祥 5
宝尽し 福を呼ぶモノ」

講師 当館学芸員 川延安直・小林めぐみ
日時 九月一五日(水)午後一時半～三時
特別講座「風土の文化誌」
「伊佐須美・都々古別お成り道」
講師 当館名誉館長 高橋富雄
日時 七月二三日(金)午後一時半～二時半
「前途三千里 白河未知の奥への門」
講師 当館名誉館長 高橋富雄
日時 八月二七日(金)午後一時半～二時半
「八十里越挽歌 河井継之助イフ史論」
講師 当館名誉館長 高橋富雄
日時 九月二四日(金)午後一時半～二時半

考古学講座
「縄文土器をつくる」(実技)
講師 当館学芸員 渡部昌二・高橋満
日時 七月二四日(土)午前二時～午後三時
「縄文土器をつくる」(実技)
講師 当館学芸員 渡部昌二・高橋満
日時 七月二五日(日)午前二時～午後三時
「土偶・足形・手形をつくる」(実技)
講師 当館学芸員 渡部昌二・高橋満
日時 七月三一日(土)午後一時半～三時
「縄文土器の野焼き」
「大昔の生活を体験しよう」(野外)
講師 当館学芸員 渡部昌二・高橋満
日時 八月二二日(日)午前二時～午後三時
「石器作りに挑戦」(実技)
講師 当館学芸員 藤原妃敏
日時 九月二五日(土)午後一時半～三時

福島県立博物館指導者向け研修講座
講師 当館学芸員 南雲修他
日時 八月四日(水)午前二時～午後四時

自然史講座
「シリーズ自然史3 鶴ヶ城の自然(野外)」
講師 当館学芸員 古川裕司
日時 九月一八日(土)午後一時半～三時半

木曜の広場

場所 講堂 入場無料

会津学事始め 四季の生業と暮らし
第四回
「赤米」
日時 七月二一日(木)午後一時半～三時

第五回
「焼畑とカブ」
日時 八月七日(土)午後一時半～三時

第六回
「収穫儀礼」
日時 九月二一日(木)午後一時半～三時

実演

「昔語り」
語り部 横山幸子さん
日時 七月一八日(日)午前二時～正午
九月二六日(日)午前二時～正午
語り部 山田登志美さん
日時 八月八日(日)午後一時半～午後三時
九月二九日(日)午後一時半～午後三時
「機織り」
染織工芸家 山根正平さん
日時 七月二九日(月・祝)
午後一時半～午後三時
「紙芝居」
紙芝居作家 五十嵐邦子さん
日時 八月二五日(日)午後一時半～午後三時

伝統技術実演
「檜枝岐の曲物づくり」
伝統技術保持者 星寛さん
日時 九月二〇日(月・祝)
午後一時半～午後三時

やさしい展示解説会

* 展示解説員による常設展の案内です。
* 毎週土曜日午後二時から三〇分間
* 毎週日曜日午前二時から三〇分間と午後二時から六〇分間です。
* なお、都合により開催しないこともありま
すので、御了承下さい。
* その他、行事等の詳細に関しましては、月
間行事予定表やホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

八月二一日(土 県民の日)
九月二〇日(月 敬老の日)

七月の休館日

七月 五月(月)・二日(月)・二〇日(火)・
二六日(月)
八月 二日(月)・九日(月)・一六日(月)・
二三日(月)・三〇日(月)
九月 六日(月)・十三日(月)・二一日(火)・
二七日(月)

* 八月二〇日(火)～八月二五日(日)までは、
午後七時まで閉館します。(入館は六時半ま
で)

* 小・中学生、高校生は常設展を無料で
ご覧いただけます。